

編集委員長交代のご挨拶

並木 温

東邦大学医学部卒後臨床研修/生涯教育センター

3年間「東邦医学会雑誌」編集委員長を務めさせていただきましたが、2014年4月1日より杉山 篤先生にバトンタッチいたしました。この3年間サポートいただいた編集委員の先生方、東邦大学医学会の住野泰清運営委員長をはじめとする運営委員の諸先生、東邦大学医学部内外の「東邦医学会雑誌」関係者、そして何よりも「東邦医学会雑誌」をご愛読いただきました皆様に、まずもって心より御礼申し上げます。

思えば3年前、前編集委員長の金子弘真先生から気軽な思いで引継ぎを受けました。しかしその後押し寄せる原著論文などの投稿原稿や査読結果、もろもろの事務書類など、東邦大学医学会事務局から送られて来る分厚い学内便を手にする度に、ちょっとブルーな気分になりつつ気合を入れて開封していた頃が懐かしく思い出されます。専門外であっても論文を通読し、論文としての体裁が確保されているか、ジャンルは間違いないか、査読はどなたにお願いするのが適当か、など、ときにはアドバイスをいただきながら決めて行きました。また巻頭言や論評、学会参加記や教室（診療科）紹介の依頼先を決定するために、東邦大学医学部や医療センター3病院全体のバランスを考えながら予想外に多くの時間を必要とすることを知りました。ごくごくまれにはありましたが、著者と査読者が感情的に対立し、トラブルシューティングに奔走したことも懐かしい思い出となっております。

「東邦医学会雑誌」は、学内誌として今まで長年の歴史を経て、現在のスタイルが確立されております。しかし東邦ブランディングプロジェクトに足並みを揃えて、第59巻第1号（平成24年1月）より表紙を全面的に改訂しました。この3年間に内容として新たに加わったものとして、「学位（博士）授与の記録」があります。これは東邦大学大学院医学研究科からの要請が発端ではありましたが、本学から授与した学位（博士）の概要をより広く知ってもらいたいという願いからのものです。従来は「学位授与」として授与

された方の氏名、所属、論文タイトル、雑誌名、指導者、主査、副査の氏名だけの記載でしたが、論文内容の要旨も全文掲載することといたしました。

さらに昨年より、東邦大学学術リポジトリの一環として、第59巻第1号（平成24年1月）以降の東邦医学会雑誌がインターネットにて閲覧することができるようになりました。論文タイトルと著者名の検索が可能となっており、2013年7月～2014年2月のアクセス数は14,015件でした。今後ますますの増加が期待され、東邦医学会雑誌の評価がより高まってくれることを願っております。

わが国においても近年研究倫理や利益相反（conflict of interest : COI）の重要性が認識されるようになってきました。二重投稿に対しては以前より厳しく対応しておりましたが、東邦大学大学院医学研究科と歩調を合わせる形で倫理委員会の承認番号やCOIに関する記載を求め、投稿時のチェックリストや査読者の審査用紙にも項目を追加しました。

現在最も危惧していることは、「東邦医学会雑誌」への原著論文などの投稿数の低下です。「東邦医学会雑誌」の最大の使命は若手研究者の育成、つまり若手研究者や医師が多く、の試行錯誤を繰り返し、そのプロセスに形成的評価と的確なフィードバックを受けつつ成長し、やがて一流誌へ投稿できる実力をつけるためのお手伝いをすると考えて参りました。東邦大学医学部の各部門で若手研究者が順調に育成されていれば何も問題はないのですが、「東邦医学会雑誌」への投稿論文の減少が東邦大学医学部、特に臨床系診療科の若手医師のリサーチマインドの低下に起因するものでないことを祈っております。しかし図1に示す通り、英文論文の割合が上向いていることは望ましい方向性と考えております。

この3年間、「東邦医学会雑誌」や東邦大学医学部にどの程度貢献できたかを自ら判断することはできませんが、自分なりに「東邦医学会雑誌」編集委員長としてベストを尽

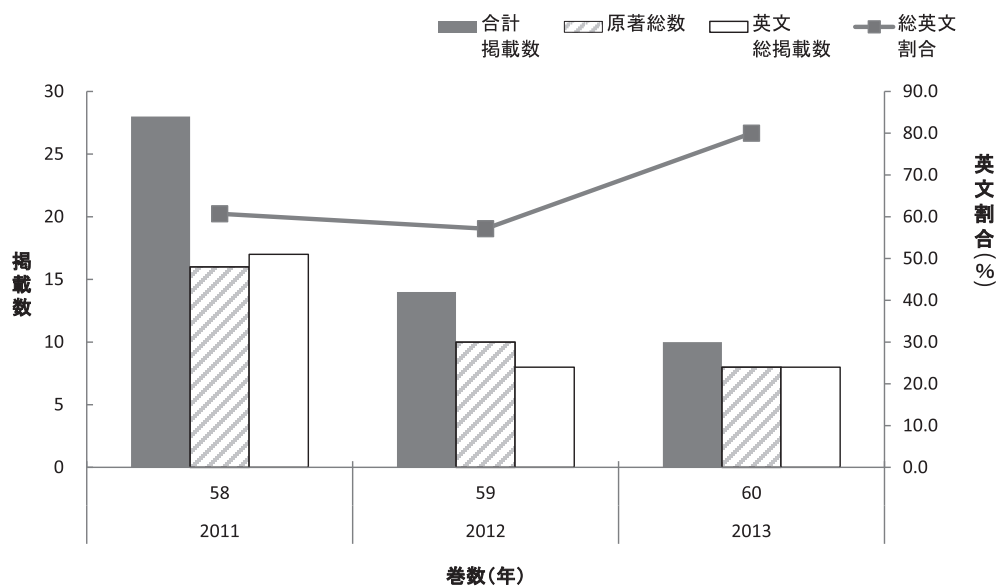


図1 総掲載数, 原著論文総数および総英文論文総数とその割合

くして参りました。杉山 篤新編集委員長のもと、新たな体制で「東邦医学会雑誌」が今後ますます発展することを心から期待しております。今まで「東邦医学会雑誌」を支

えてこられた方々、特に東邦大学医学会事務局の高口亜維さんの献身的な尽力に心から感謝いたします。